特色ある県立高校づくり懇談会　資料

四つの提案について

構成員　安原克彦

▶はじめに

前回、第１回目の会議におきまして、私安原は、阿部知事の提言された「よりプラクティカルな議論を」という要請に応えるべく、４つの具体的提案をさせていただきました。

①「助けて！　高校生」制度

②信州を元気に高校生会議

③高校教師の待遇改善

④特色ある高校としての広報・宣伝活動

会議では時間の都合上、各提案に至った経緯や提案内容を詳しく説明できませんでしたので、改めて概要をまとめ、資料として提出させていただきます。前回も申し上げました通り、たたき台として扱っていただければ幸せです。

・・

▶概要

①助けて！　高校生制度

＜提案理由＞

当懇談会の第１回が開催される直前、「あなたは高校にどんなことを望みますか」という問いに記述式で自由に答えるアンケートを、塾生対象（中学生～高校生）にとった。アンケート結果をまとめたものが、本資料の最後に掲載してある。

そのアンケートの中に、「アルバイトをしたい（中１生)」という声があった。一般に、高校生のアルバイトに関しては、遊ぶためのお金欲しさと捉え、警戒する向きもあろう。しかし、子どもたちの意識はもっと高いところにあると考える。「社会人になる前に、社会のことをもっと知り

たい」、「生きていく力を身に着けたい」という前向きな意志の表れではないか。
　第１回の議論でも、複数の構成員から、「生きる力」、「稼ぐ力」の取得の必要性が指摘された。また、第１回配布資料には、地域の声として、「地元を支える人材育成」、「地域の産業への就職を視野に入れた学校教育」が挙げられている。さらに、同資料にある《高校改革》の骨子には、「新たな学び」、「多様な学び」という文言がある。本提案は、人材不足、人材育成、地域の活性化に貢献しつつ、「新たな学び」、「多様な学び」の実践にもなることを狙う。高校生側のニーズと、地域社会のニーズがかみ合ったところに、本提案の意義がある。

＜内容＞

　簡単に言えば、高校生のインターンシップ制、あるいはデュアルシステムに倣ったものである。高校生は、各高校が特色を持って提示するいくつかの選択肢から、職種を選び、定期的あるいは短期的に（夏季休業中になど）就労することができる。就労期間や仕事の内容については、高校生の学業の妨げとならないよう、ある程度決められたスケジュールや規則にのっとる必要がある。
　賃金の有無、多寡は、雇う側と、学校側の同意により決まる。
　何らかの形で授業単位に変換され、あくまでも学業の一環として扱われることが望ましい。
　選べる職種の例は以下の通り。学校ごとに特色を出した職種を用意する。

　〇農業
　〇林業
　〇医療・介護
　〇工業
　〇その他一般企業
　〇学校
　〇役所などの公的機関
　〇飲食業
　〇観光業
　〇ボランティア
　　など。

＜課題＞

　高校生にとって危険なアルバイトや、教育上問題のあるアルバイト、「学業の一環」という趣旨にもとるアルバイト等を選択肢から排除するため、学校による指定制度の導入等、しっかりした仕組みづくりが必要となる。学校側の負担を増やさないために、高校と生徒と民間の三者を結ぶコーディネーターの介在があってもよいかも知れない。
　現状では、多くの高校生は部活動にかなりの時間を取られている。本制度の実行のためには部活動との兼ね合いも問題となる。アンケートにも、部活動の時間の短縮を求める声がある（高２）。課外活動における拘束時間の見直し等の検討も必要かもしれない。

あくまでも学業の一環として存立するという本制度の趣旨や、既存のアルバイトとの違いを、生徒・保護者へ周知徹底することが求められる。

②信州を元気に高校生会議

（※前回、第１回の懇談会では、この高校生会議が取り上げる主なテーマを、高校改革そのものであるかのように説明した記憶がありますが、以下に述べます通り、もっと広く、長野県の活性化につながる諸問題を取り上げ、議論するものとして考えています。）

＜提案理由＞

信州が抱える社会的問題は数あるが、その中でも超高齢社会から派生する諸問題―――町の衰退、買い物難民、空き家問題、後継者問題、等―――は次世代の若者にこそ大きくかかわる問題である。大人や老人が元気でない県に、どうして高校生ら若者が魅力を感じることができるだろうか。その他にも、環境問題等、焦眉の問題が数多く存在する。これらの解決には、高校生の若く柔軟な発想と行動力が欠かせない。「高校生会議」は、高校改革において叫ばれる「探究的な学び」の実現と、長野県全体の活性化を結びつけるものである。ひいては、将来長野県に資する優秀な政治家・公務員等を育成する狙いもある。

＜内容＞

県内の複数の高校からの参加で、学校間の垣根を越えた高校生会議を行う。選ばれた高校生は、県庁や市役所など公的機関で一定の研修を行うのも効果的であろう。議題は高校生からの提案、行政からの提案、市民からの提案などから選ばれ、長野県をより魅力的かつ暮らしやすい県にするためのアイデアを討論する。単発のイベント、という形で終わらず、部活動や生徒会と同じ位置づけにして、世代交代も含め、息の長い取り組みにすることが必要だと考える。

当「会議」でその都度出される報告に対しては、行政がその対応を協議する。

＜課題＞

どこまで生徒に自主性を持たせ、どこまで大人が誘導するか、が課題の一つとなりえる。また、議論をする上での一定の知識の習得が、「会議」を有意義な内容のものにする上では欠かせない。前述の公的機関での研修もその対策の一つとなろう。高齢化問題や環境問題のように、若い彼らにとって身近に感じられないにしても、将来明らかに自分たちに大きくかぶさってくるであろう社会問題に取り組ませるため、教える側による一定の方向付けは必要となるかもしれない。

③高校教師の待遇改善

＜提案理由＞

高校の魅力とは、第一に授業であり、それを取り仕切る教師であると考える。塾生へのアンケートにも、「授業がつまらない。もっと面白くしてほしい（高１生)」「授業をもっとわかりやすく（高２生)」など、授業に関わるものが多かった。中には「教師の仕事量を減らし、もっと生徒に向き合えるようにしてほしい（高３生)」と、教師の過重労働をおもんばかるものもあった。高校の授業が難しいのは当然であり、だからこそつまらないと思われるのも当然、という主張もある。しかし、難しいながらも面白く、わからないながらも学ぶ意義を感じられるものに、という努力は、決して怠るべきではない。

それは突き詰めれば「教師の質」という問題になる。が、実は「教師のコンディション」と言いかえた方がいいかも知れない。教師が良いコンディションを維持していれば、よりよい授業が期待できるはずである。優秀な人材が多く教師を目指せる環境を整えるとともに、現在職務に就く優秀な教師たちが、いかんなく実力を発揮できる環境作りが欠かせない。

塾側から一言。教える側に求められるのは、教える技術は当然だが、それ以上に熱量である。１回１回の授業にかける思いである。これは、塾の場合、生徒の流出を食い止めるための最低条件となる。公立高校は即時的な生徒の流出はないとは言え、求められるものは基本的には同じはずである。教師が心身ともに健康で、一生懸命授業に取り組める環境が整えば、それだけで「長野県の公立高校は変わった」と評価されるであろう。

＜内容＞

県内ならびに他県から優秀な人材を呼び込むためにも、思い切った施策が必要である。給与の増額、授業以外の仕事の軽減等、高校教師の待遇改善を提案する。また、社会的な批判の対象にされやすい教師の立場を守るため、法テラスのような法律上の助言を与えられる人材の確保が、彼らの精神面の健康の維持に利するであろう。同時に、研究授業や、教員をしながら大学院に通える制度の充実など、教師としての質の向上も求められる。

なお、人材確保のため、優秀な予備校講師など一定のスキルのある社会人を非常勤講師などに採用しやすくする制度もあってよいであろう。塾や予備校の講師の中には、学校の教師の職を希望する者が少なくないと考えるからである。

＜課題＞

給与泥棒と言われないためにも、ただの待遇改善ではなく、その分、教師が熱意をもって授

業内容の改善に努力するような施策にしなければいけない。大学入試に話を限っても、センター試験から大きく難化した共通テストに対応するには、今までの授業の在り方では不十分な面が多々ある。高校改革は、つまるところ授業改革である。教師に求められるものを高くすると同時に、その見返りも増やす。そのバランスが課題となる。

④特色ある高校としての広報・宣伝活動

＜提案理由並びに内容＞

そもそも、県内各公立高校が、特色ある高校へと変革を目指す一方で、その内容が県内外の中学生や保護者にきちんと伝わらなければ意味がない。各校は、今以上に広報・宣伝に力を入れるべきである。当然、宣伝すべき内容を充実させるべく、自分たちの学校の特色とは何かを見直し、模索するのも大切である。普通科はもちろん、専門学科も、中学生にとっては、その魅力を知る機会がまだあまりに少ないと言える。受験校をただ偏差値で選ぶ、という現状を打破するためにも、各高校が創意工夫した広報活動をすることが求められる。その際、現役高校生たちの知恵と手を借りるのもよいかも知れない。

以上が四提案の概要となる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

▶参考資料として―――アンケート結果

当懇談会の第一回開催前にとった、塾生対象のアンケートの結果である。質問項目はたった一つ、「あなたは高校にどんなことを望みますか」。記述形式で、何を書いても自由。提出するしないも自由。極力、強制にならないように留意した。中学生から高校生まで３０人程度に依頼し、１３人から回答を得た。

これはもちろん、決して多数派の意見として扱われるべきではない。どれも一個人の意見であり、中には稚拙だったり偏っていると思われるものも見受けられる。ただ、このアンケートの声も参考にしながら、私安原は上記の四提案を作成した。ここに掲載し、何らかのヒントを与えてくれる材料にでもなればと願う。

なお、あまりに個人的見解に過ぎると思われるものは省いた。文言も、私安原が簡潔にまとめ直したものである。

（高校３年生 A）

・大学と同じように自分が興味あるものを選択できる制度を。

（高校３年生 B）
・高校卒業までに授業が終わらない科目がある。
・受験で使わない科目を強制的にやらされた。
・教師の仕事量を減らし、もっと生徒と向き合えるようにして欲しい。

（高校２年生）
・授業をもっとわかりやすく。
・質問ができやすい環境づくりを。

（高校２年生）
・部活終了時間が遅く、帰宅が遅くなる。
・校則等で、もっと生徒の意見を聞いて欲しい。
・部活の休みを週２日は欲しい。

（高校２年生）
・映画鑑賞会など、英語の授業にもっと工夫を。
・勉強合宿がしたい。

（高校１年生）
・将来の選択肢の幅の広がる高校が増えるとよい。
・大学を知る機会をもっと増やしてほしい。
・短期留学や、ホームステイの機会を増やしてほしい。
・座学だけでなく、屋外の授業（地域を知る機会）を増やしてほしい。

（高校１年生）
・学習内容が前年度より増えすぎてないか。
・教師の説明を聞くだけでなく、自分たちで問題を解く時間を。
・グループワークをもっと増やしてほしい。
・授業がつまらない。もっと面白くしてほしい。
・理科の実験を増やしてほしい。

（中学３年生）
・国際教育に力を。オンライン授業や留学生の受け入れの充実など。

（中学３年生）
・トイレなど水回りを清潔に。
・購買や自動販売機の充実を。

（中学２年生）
・校則を緩めてほしい。

（中学２年生）
・文武両道を。

（中学１年生）
・運動部は校庭や施設を広く使える環境に。

（中学１年生）
・アルバイトをしたい。